

第 55 回(2011. 7. 13 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「中東・アラブ社会 (3)」

判断に苦しむ線引き(地理)

アラブ諸国とは「アラビア半島にある国々だ」と言う人も多いが、北アフリカの国もアラブの仲間に入れているのが一般的である。たとえば、モロッコ、アルジェリア、チュニジアのマグレブ三国(アラビア語で西方、日の沈む地という意味)やリビア、エジプト、モーリタニア、ジブチ、ソマリアなどは、地図上ではアフリカ大陸だから、中東地域には入らないと思うのも無理もない。アラブという定義は中東にあってアラビア語を話しイスラム教を信じている国や人間を指すから、北アフリカまで中東の仲間に入れるのはおかしいと思う人も多いが、経済的にはサハラ砂漠以南と以北とではかなりの差があるし、また文化的にはアラビア半島を中心とした地域の仲間に入るから、文献によっては統計上などで中東地域として数えられているものもあるわけである。

前回は触れたように、イランやトルコは地理上では中東だがアラブの仲間ではない。中央アジアの国々はイスラム教徒が大部分だが、地理上は中東には入らない。アフガニスタンまでがアラブの仲間である。ちなみに、中央アジアにはパキスタンはじめウズベキスタン、タジキスタン、カザフスタンなど、「スタン」がつく国が多い。この「スタン」とは古代ペルシャ語で「～の住む場所」の意味である。

そこで、一般的に「中東」と言ったら、東はイラン高原から西はサハラ砂漠まで、北はカスピ海沿岸から南はアラビア半島までの広範囲にわたるが、この地方はもともとヨーロッパでは「オリエント」と呼ばれていた。オリエントとはラテン語の「オリエンス(昇る)」からきた言葉で、太陽が昇る方向すなわち「東方」を意味している。ローマ帝国が東西に分裂してそれぞれの文明が形成されていく過程の中で、西ローマ帝国が東ローマ帝国、特にイスラム教社会に対してオリエントと呼んだことからきている。

また、1902年にアメリカの提督が発表した論文の中で、インドシナ半島から朝鮮半島、日本などを指して「極東」と呼び、バルカン半島から東地中海に隣接する地域を「近東」、その中間に位置するアラビア半島やイランあるいはチグリス川やユーフラテス川下流地域を「中東」と呼び分けて使ったのが最初だという説もある。現在では、この近東と中東を合わせて「中近東」と呼ぶ場合もあり、ときには北アフリカのエジプト、リビアに加え、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、あるいはモーリタニアなどを含めて中東あるいは中近東と呼ぶ場合もある。

なお、中世の北アフリカは「マグレブ」と呼ばれたが、アラビア語で「西方」あるいは「日の沈む地方」という意味で、東方の日が昇る地方「マシュリク」に相對する呼び方である。また、シリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ帯は「シャーム」、聖地メッカやメディナを含むアラビア半島の大部分を「ヒジャーズ」と呼んでいた。シャームもヒジャーズも、第一次世界大戦前はオスマン・トルコ帝国領だった。第一次世界大戦が勃発すると、イギリスは預言者ムハンマドの直系であるフセイン・イブン・アリに中東を支配させるとの約束をしたが、1924年、フセインは同じアラブ系遊牧民族のアブド・アジーズ・イブン・サウードに破れて、以後は「サウード家のアラビア」という意味で、この一帯は「サウジアラビア」と呼ぶようになった。

一般的に中東諸国といった場合、国の数にして 25(アフガニスタン、イラン、トルコ、イスラエル、キプロス、サウジアラビア、クウェート、バハレーン、カタール、アラブ首長国連邦、オマーン、イエメン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、エジプト、スーダン、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、モーリタニア、ジブチ、ソマリア)だが、「アラブ」と称される国はアフガニスタン、イラン、トルコ、イスラエル、キプロスを除いた国々にパレスチナ自治政府を入れて 21 か国で、面積は日本の約

45倍、アメリカの2倍に近いが、人口は3億人にも満たない。

いずれにしても、中東もしくは中近東と言った場合、それぞれが状況に合わせてそれぞれの立場にたって使い分けているのが現状である。それは、地理的、文化的あるいは経済的に複雑に影響しあっているからで、どこで線引きして良いのか判断に苦しむことが多いからだろう。

『千夜一夜物語』は子供向けの話ではない

中東やアラブの話になると、友人たちはアラビアン・ナイトの世界を想像するらしい。なかでも、女性の友人たちはロマンチックな気分になって、ああでもないこうでもないで喧しくてじっくり話を聞いてくれない。それほど日本人に愛されている『アラビアン・ナイト物語』は、『千夜一夜物語』あるいは『千一夜物語』とも呼ばれているが、原題がアラビア語の『アルフ・ライラ・ワ・ライラ(千夜一夜)』といい、シャハラザードという美しい聡明な女性が国王に毎夜一話ずつ話をする物語である。アルフ(千)は、アラビア語で非常に多い数を表すし、偶数より奇数が縁起がよいので、千と一で『千夜一夜(千一夜)物語』だという説もある。作者は不明だが、原典そのものがインド物語の影響を多分に受け継いでペルシャで書かれ、その後アラビア語に翻訳されたという説もある。

12世紀ごろには、すでに『アルフ・ライラ・ワ・ライラ』と呼ばれていたようだが、最初は282話しかなく、当時イスラム帝国の首都だったバグダッドが衰退していった13世紀以後は、エジプトのカイロでさらに多くの話が増えられて、現在のようになったのは17世紀以降らしい。実際、ひとつの話が一夜で語られたわけではなく、幾夜にもわたって語られていたり、ひとつの話にいくつかの枝葉のように支話が作られたりしているから千一夜になるという説もある。『千夜一夜物語』はフランスで最初に翻訳されて、一躍ヨーロッパでベストセラーになり、イギリス人により『アラビアン・ナイト・エンターテイメント』と題して明治時代の日本に持ち込まれたので、わが国では『アラビアン・ナイト物語』と呼ばれるようになった。原典の『アルフ・ライラ・ワ・ライラ』は、非常にエロチックでかつグロテスクな話が多く、また難しい読み物である。もっとも、グリム童話にしる、アンデルセンの童話にしる、原典はけっこう残酷な話も多く、それは日本のおとぎ話にも言えることで、本来は子供向けの話ではない。とはいえ、中東・アラブ社会を知る上での貴重な文献であることは間違いない。

そういった話をする、友人たちはあまりいい顔をしない。少年少女時代に『アラビアン・ナイト物語』の絵本を読んで、エキゾチックな物語に胸を躍らせたものだから、彼らは純粋だった子供のころの思い出を傷つけられたような気分になるのかもしれない。今の彼らを見れば、そんな純粋な時期があったとは到底思えないのだが、余計なことを言って彼らの夢を壊してはいけないのだろう。しかし、持って生まれた親切な性格から、他人の幸せな気分をぶち壊すような言葉がつい口をついて出てくるので困っている。こうして、だんだんと友人を減らしている。